

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	三島 菜乃 (みしま なの)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	修士課程 2年
発表年月 または事業開催年月	2022年 10月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本認知・行動療法学会第 48 回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	三島 菜乃, 田島えみ, 神野遥香, 畑琴音, 鈴木伸一
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	がん患者の身体症状の知覚と Benefit Finding の背景要因の検討
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>【背景と目的】BF とは、がんへの罹患という経験を乗り越え、病気の体験やこれからの人生に肯定的な意味づけをするという、経時的でポジティブな心理面の変化を指す (Tennen & Affleck, 2002)。BF に影響を与える要因として、現在、痛みや倦怠感などのがんに起因する身体症状があげられていることから、本研究では、痛みや倦怠感といった身体症状と、BF の高低を組み合わせた群分けを行い、各群について、属性を中心とした背景情報の基礎的なデータを記述することとした。</p> <p>【方法】がん患者 90 名 (男性 40 名, 女性 49 名, 不明 1 名; 平均年齢 64.1 歳) を分析対象とした。調査項目は社会的・医学的背景, Benefit Finding : Japanese Benefit Finding Scale (Ando et al., 2011), 倦怠感 : Cancer Fatigue Scale (Okuyama et al., 2000), 痛み : Pain Catastrophizing Scale 日本語版 (PCS ; 松岡・坂野, 2007) とした。本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された (承認番号 : 2019-119)。</p> <p>【結果】痛みや倦怠感といった身体症状の高低と、BF の高低を組み合わせて、背景情報を記述した結果、痛み・BF とともに高い群は、罹患年数が長い (6 年以上) 割合が多く (47.6%), 再発の経験がある者の割合が一番多かった (33.3%)。また、倦怠感・BF とともに高い群は、転移の経験がある者の割合が一番多かった (43.8%)。</p> <p>【考察】身体症状が高くても BF が高い群の特徴は、罹患年数が長いこと、転移の経験があること、再発の経験があることであった。倦怠感を感じやすい化学療法を受けながら就労しているがん患者は、病気とうまく付き合っている感情を抱きやすい可能性が示されている (田村他, 2015)。このことから、倦怠感を知覚しつつも、健康を管理する感覚を得る過程で、BF を経験する可能性が考えられる。また、がん患者は、がんへの罹患を通じて存在価値を模索する (川村, 2005)。このことから、長期間がんと生きていく中で、がんへの罹患の意味の見出しを繰り返し行うことから、痛みを知覚しながらも BF を経験する可能性があるといえる。さらに、転移や再発は悩みの原因となる一方で、成長を促し、人生に対する理解と、目的を自覚することにつながることから (Parry, 2003), がん患者は、再発や転移の痛みを知覚したうえで、その経験から人生の意味を見出し、BF を経験しているプロセスが考えられる。</p>	

※無断転載禁止